

みさごの鮎

泉鏡花

青空文庫

一

「旦那さん、旦那さん。」

目と鼻の前に居ながら、大きな声で女中が呼ぶのに、つい箸の手をとめた瘦形の、年配で——浴衣に貸広袖を重ねたが——人品のいい客が、

「ああ、何だい。」

「どうだね、おいしいかね。」

と額で顔を見て、その女中はきよろりとしている。

客は余り唐突なのに驚いたようだった。——少い経験にしろ、数の場合にしろ、旅籠でも料理屋でも、給仕についたものから、こんな素朴な、実直な、しかも要するに猪突な質問を受けた事はかつてない。

ところで決して不味くはないから、

「ああ、おいしいよ。」

と言ってまた箸を付けた。

「そりや可い、北国一だろ。」

と洒落でもないようで、納まった真顔である。

「むむ、……まあ、そうでもないがね。」

と今度は客の方で顔を見た。目鼻立は十人並……と言うが人間並で、色が赤黒く、いかにも壮健そうで、口許のしまったは可いが、その唇の少し尖った処が、化損った狐のようで、しかし不気味でなくて愛嬌がある。手織縞のごつごつした布子に、よれよれの半襟で、唐縮緬の帯を不状に鳩胸に高くしめて、髪はつい通りの束髪に結っている。

これを更めて見て客は気がついた。先刻も一度その（北国一）を大声で称えて、裾短な脛を太く、臀を振って、ひよいと踊るように次の室の入口を隔てた古い金屏風の陰へ飛出して行つたのがこの女中らしい。

ところでその金屏風の絵が、極彩色の狩野の何某在銘で、玄宗皇帝が同じ榻子に、楊貴妃ともたれ合つて、笛を吹いている処だから余程可笑しい。

それは次のような場合であつた。

客が、加賀国山代温泉のこの近江屋へ着いたのは、当日午少し下る頃だった。玄関へ

立つと、面長で、柔和^{やわら}かなちつとも氣取^{きどり}つけない四十ぐらいな——後で聞くと主人だそうで——質素な男が出迎えて、揉手^{もみて}をしながら、御逗留^{ごとうりゆう}か、それともちよつと御入浴で、と訊^きいた時、客が、一晚お世話に、と言うのを、腰を屈^{かが}めつつ畏^{かしこま}つて、どうぞこれへと、自分で荷物を捌^{さば}いて、案内をしたのがこの奥の上段の間で。次の室^まが二つまで着いている。あいにく宅は普請中でございますので、何かと不行届^{ふゆきとどき}の儀は御容赦下さいまして、まず御緩^{ごゆつく}りと……と丁寧^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}をして立つと、そこへ茶を運んで来たのが、いま思うところの女中らしい。

実は小春日^{こはるび}の明^{あかる}い街道から、衝^つと入ったのでは、人顔も容子^{ようす}も何も分らない。縁を広く、張出しを深く取った、古風で落着いただけに、十畳へ敷詰めた絨^{じゅうたん}毯^{たん}の模様も、谷へ落葉を積んだように見えて薄暗い。大きな床の間の三幅^{さんぷく}対^{たい}も、濃い霧の中に、山^{はる}が遙^{はるか}に、船もあり、朦朧^{もうろう}として小さな仙人の影が映^さすばかりで、何の景色だか、これは燈^{あかり}が点^ついても判^は然^{はつきり}分^わらなかつたくらいである。が、庭は赤土に薄日^{うすひ}がさして、塔形の高い石燈^{いしどう}籠^{ろう}に、苔^{こけ}の真蒼^{まっさお}なさびがある。ここに一樹、思うままの松の枝ぶりが、飛石に影を沈めて、颯^{さつ}と渡る風に静寂な水の響^{ひびき}を流す。庭の正面^{きつたて}がすぐに切立^{きりだて}の崖で、ありのままの雑木林に萩^{はぎ}つつじの株、もみじを交ぜて、片隅なる山笹の中を、細く蜿^{うね}り蜿^{うね}り自然^{おおい}の大

巖を削つた径が通じて、高く梢を上つた処に、建出しの二階、三階。はなれ家の座敷があつて、廊下が棧のように覗かれる。そのあたりからもみじ葉越しに、駒鳥の囀るような、芸妓らしい女の声がしたのであつたが――

入交つて、齒を染めた、陰気な大年増が襖際へ来て、瓶掛に炭を継いで、茶道具を揃えて銀瓶を掛けた。そこが水屋のように出来ていて、それから大廊下へ出入口に立てたのが件の金屏風。すなわち玄宗と楊貴妃で、銀瓶は言いけれども。……次にまた浴衣に広袖をかさねて持つて出た婦は、と見ると、赭ら顔で、太々とした乳母どんで、大綿のねんね子半纏で四つぐらいな男の児を負つたのが、どしりと絨毯に坊主枕ほどの膝をつくと、半纏の肩から小児の顔を客の方へ揉出して、それ、小父さんに（今日は）をなさいと、顔と一所に引傾げた。

学士が驚いた――客は京の某大学の仏語の教授で、榊三吉と云う学者なのだが、無心の小児に向つては、盗賊もあやすと言う……教授でも学者でも同じ事で、これには莞爾々々として、はい、今日は、と言つた。この調子で、薄暗い広間へ、思ひのほかのものが顕れるから女中も一々どれが何だか、一向にまとまりが着かなかつたのである。

昼飯の支度は、この乳母どのに逃えて、それから浴室へ下りて一浴した。……成程、

屋の内は大普請らしい。大工左官がそちこちを、真昼間の夜討のように働く。……ちよ
うな、鋸のこぎり、鉄鎚かなづちの賑かな音。――また遠く離れて、トントントントンと俎まないたを打つのが、
ひっそりと聞えて聳こたまする……と御馳走ごちそうに頼つぐみをたたくな、ときもしい話だが、四高（金沢）
にしばらく居たことがあって、土地の時のものに予備知識のある学者だから、内々御馳走
を期待しながら、門から敷石を細長く引込んだもとの大玄関を横に抜けて、広廊下を渡る
と、一段ぐつと高く上る。座敷の入口に、いかにも（上段の間）と札に記してある。で、
金屏風の背後うしろから謹んで座敷へ帰ったが、上段の室まの客にはちと不釣合な形に、脇きよう息そく
を横倒しに枕して、ごろんとなくなると、瓶掛の火が、もみじを焚たいたように赫かっと赤く、
銀瓶の湯気が、すらすらと楊貴妃を霞ませる。枕もとに松しょうらい籟いをきいて、しばらく理窟
も学問もなくなつた。が、ふと、昼飯ひるの膳ぜんに、一銚子ひとちょうし添えさせるのを言忘れたのに心づ
いて、そこで起たちあが上あがつた。

どこを探しても呼よび鈴りんが見当らない。

二三度手を敲たたいてみたが――これは初めから成算がなかった。勝手が太分たいぶんに遠い。座敷
の口へ出て、敲いて、敲きながら廊下をまた一段下りた。

「これは驚いた。」

更に応ずるものがなかったのである。

一体、山代の温泉のこの近江屋は、大まかで、もの事おっとりして、いま式に余り商売にあせらない旅館だと聞いて、甚だ嬉しくて来たのであるが、これでは余り大まか過ぎる。何か、茸きのこに酔った坊さんが、山奥から里へ迷出たといった形で、手をたたき、たたき、例の玄関の処へ出て、これなら聞えようと、また手を敲こうとする足許あしもとへ、衝立ついたての陰から、ちよろりと出たのは、今しがた乳母どのおぶわれていた男の児で、人なつツこく顔を見て莞爾にこにこ々々する。

どうも、この鼻尖はなさきで、ポンポンは穩おだやかでない。

仕方なしに、笑って見せて、悄悄すこすこ々と座敷へ戻って、

「あきらめろ。」

で、所在なさに、金屏風の前かしこまへ畏きつて、吸子きゆうすに銀瓶ぎんべいの湯を注ついで、茶でも一杯と思つた時、あの小児こどもにしてはと思う、大な登足おおきあしおとが響いたので、顔を出して、むこうを見ると、小児と一所に、玄関前で、ひよいひよい跳ねている女があつた。

「おおい、姉さん、姉さん。」

どかどかどかと来て、

「旦那さんか、呼んだか。」

「ああ、呼んだよ。」

と息を吐いて、

「どうにかしてくれ。——どこを探しても呼鈴はなし、手をたたいても聞えないし、——弱ったよ。」

「あれ。」

と首も肩も、客を圧して、突込むように入って来て、

「こんな大い^{でけ}内^{うち}で、手を敲いたって何が聞えるかね。電話があるでねえか、それでお帳場を呼びなさいよ。」

「どこにある。」

「そら、そこにあるがね、見えねえかね。」

と客の前から、いきなり座敷へ飛込んで、突立状^{つたちざま}に指^{ゆびさ}したのは、床の間傍^{わき}の、櫥子^{れんじ}に据えた黒檀^{こくたん}の机の上の立派な卓上電話であつた。

「ああ、それかい。」

「これだあね。」

「私はまたほんとうの電話かと思っていた。」

「おお。」

と目を円くして、きよろりと視^みて、

「ほんとの電話ですがね。どこか間違つたところでもあるのかよ。」

「いや、相済まん、……間違つたのは私の方だ。——成程これで呼ぶんだな。——分りました。」

「立派な仕掛^{しかけ}だろがねえ。」

「立派な仕掛だ。」

「北国一だろ。」

——それ、そこで言つて、ひよいひよい浮足^{うきあし}で出て行く処^ゆを、背後^{うしろ}から呼んで、一銚子を誂えた。

「可^いいのを頼むよ。」

と追掛けに言うと、

「分つた、分つた。」

と振り向いて合点^{がってん}々々をして、

「北国」。

と屏風の陰で腰を振って、ひよいと出た。——その北国一を、ここでまた聞いたのであった。

二

「まあ、御飯をかえなさいよ。」

「ああ……御飯もいまかえようが……」

さて客は、いまでの話の口が解けたほどと思うらしい面色おももちして、中休みに猪口ちよくの酒を一口した。……

「……姐ねえさん、ここの前を右へ出て、大な絵はがき屋おおきだの、小料理屋にぎやかだの、賑にぎやかな処を通り抜けると、旧街道のようまちやで、町家の揃まじった処がある。あれはどこへ行く道ゆだね。」

「それはね、旦那なやさん、那谷なやから片山津かたやまつの方へ行く道だよ。」

「そうか——その中ほなどに、さきが古道具屋と、手前とうゆが桐油すげがさや菅笠屋の間に、ちよつとした紙屋があるね。雑貨も商あっている……あれは何と言う家うちだい。」

「白粉おしろいや香水も売っていて、
陰気な、あれかあね。」
「全くだ、陰気な内だ。」

と言つて客は考えた。

「それは、旦那さん——あ、あ、あ、何屋とか言つたがね、忘れたよ。口まで出るけども。」

と給仕盆を鞠まりのように、とんとんと膝を揺ゆつて、

「治兵衛坊主じへえぼうずの家ですよ。」

「串じょうだん戲ではない。紙屋で治兵衛は洒落ではないのか。」

「何、人が皆そう言うでね。本当の名だか何だか知らないけど、治兵衛坊主で直じきと分るよ。旦那さん、知っていなさるのかね、あの家を。」

客は、これより前さき、ちよつと買ものに出たのであつた。——実は旅の事欠けに、半紙に不自由をしたので、帳場へ通じて取寄せようか、買いに遣やろうかとも思ったが、式かたのごとき大まかさの、のんびりさの旅館であるから、北国一の電話で、呼寄せていいつけて、買

いに遣つて取寄せる隙に、自分で買つて来る方が手取早い。……膳の来るにも間があるう。そう思つたので帽子も被らないで、黙りで、ふいと出た。

直き町の角の煙草屋も見たし、絵葉がき屋も覗いたが、どうもその類のものが見当らない。小半町行き、一町行き……山の温泉の町がかりの珍しさに、古道具屋の前に立ったり、松茸の香を聞いたり、やがて一軒見附けたのが、その陰気な雜貨店であつた。浅い店で、横口の奥が山のかぶさつたように暗い。並べた巻紙の上包の色も褪せたが、ともしく重ねた半紙は戸棚の中に白かつた。「御免なさいよ、今日は、」と二三度声を掛けたが返事をしない。しかしこんな事は、金沢の目貫の町の商店でも、経験のある人だから、短にそのままにしないで、「誰か居ませんか、」と、もう一度呼ぶと、「はい、」とその時、媚かしい優しい声がして、「はい、」と、すぐに重ね返事が、どうやら勢がなく、弱々しく聞えたと思うと、挙動は早く棲を軽く急いだが、裾をはらりと、長襦袢の艶なのが、すらすらと横歩きして、半襟も、色白な横顔も、少し俯向けるように、納戸から出て来たのが、ぱつと明るみへ立つと、肩から袖が悄れて見えて、温室のそれとは違つて、冷たい穴蔵から引出しでもしたようだった、その顔を背けたまま、「はい、何を差上げます。」と言う声が沈んで、泣いていたらしい片一方の目を、俯向けに、紅入友染の裏が

浅葱あさぎの袖口で、ひったりおさ压えた。

中脊で、もの柔かな女の、房ふつぎり結った島田が纏もつれて、おっとりした下ぶくれの頬にかか
ったのも、もの可哀あわれで気の毒であつた。が、用を言うと、「はい、」と背後うしろむきに、戸棚
へ立つた時は、目を压えた手を離して、すらりとなつたが、半紙を抽出ひきだして、立返る頭髪かみ
も量おもそうに棲さきの運びとともに、またうなだれて、堪兼ねた涙が、白く咲いた山茶花さざんかに
霜の白粉おしろいの溶けるばかり、はらはらと落つるのを、うっかり紙にうけて、……はつと思
つたらしい。……その拍子に、顔をかくすと、なお濡れた。

うっかり渡そうとして、「まあ、」と気づいたらしく、「あれ、取換えますから、」
——「いや、宜よろしい。……」

懷中ふところへ取つて、ずつと出た。が、店を立離れてから、思うと、あの、しおらしい女の
涙ならば、この袂たもとに受けよう。口紅の色は残らぬが、瞳の影とともに玉を包んだ半紙はこ
こにある。——ちよつとは返事をしなかつたのもそのせいだろう。不思議な処へ行合せた、
と思ううちに、いや、しかし、白い山茶花のその花片はなびらに、日の片あたりが淡くさすよう
に、目が腫はれぼつたく、殊に压えた方の瞼まぶたの赤かつたのは、煩らつているのかも知れない。
あるいは急に埃ほこりなどが飛込んだ場合で、その痛みに泣いていたのかも分らない。——そう

でなくて、いかに悲痛な折からでも、若い女が商いに出てまで、客の前で紙を絞るほど涙を流すのはちと情に過ぎる。大方は目の煩いだろう。

トラホームなぞだと困る、と、その涙をとにかく内側へ深く折込んだ、が。——やがて近江屋へ帰って、敷石を奥へ入ると、酒の空樽あきだる、漬もの桶おけなどがはみ出した、物置の戸口に、石屋が居て、コトコトと石を切る音が、先刻期待した小鳥の骨をたた敲くのと同一であった。

「——涙もこれだ。」

と教授は思わず苦笑して、

「しかし、その方が僥倖しあわせだ。……」

今度は座敷に入って、まだ坐るか坐らないに、金屏風の上から、ひよいと顔が出て、

「腹おなかが空いたろがね。」と言うと、つかつかと、入って来たのが、ここに居るこの女中で、

小脇に威勢よく引抱ひっかかえた黒塗くろぬりの飯櫃めしびつを、客の膝の前へストンと置くと、一歩ひとあしすす

つたままで、突立つったって、熟じつと顔を瞰下みおろすから、この時も吃驚びつくりした目を遣ると、両手を引

込めた布子の袖を、上下に、ひよこひよこことゆさぶりながら、「給仕をするかね、」と言ったのである。

教授はあきらめて落着いて、

「おいおいどうしてくれるんだ——給仕にも何にもまだ膳が来ないではないか。」

「あッそうだ。」

と慌てて片足を挙げたと思うと、下して片足をまた上げたり、下げたり。

「腹が空いたろで、早くお飯を食わせようと思うたでね。急いたわいな、旦那さん。」
と、そのまま跳廻ったかと思うと。

「北国一だ。」

と投げるように駈け出した。

酒は手酌が習慣だと言つて、やつと御免を蒙つたが、はじめて落着いて、酒量の少い人物の、一銚子を、静に、やがて傾けた頃、屏風の陰から、うかがうかがい、今度は妙に、おつかなびつくりといった形で入つて来て、あらためてまた給仕についたのであつた。話は前後したが、涙の半紙はここにあつた。客は何となく折を見て聞いたのである。

「いましがたちよつと買ものをして来たんだが、」
と言継いで、

「彼家あそこに、嫁さんか、娘さんか、きれいな女が居るだろう。」

「北国一だ。あはははは。」

と、大声でいきなり笑った。

「まあまあ、北国一としておいて、何だい、娘かい、嫁さんかい。」

また大声で、

「押惚おっぼれたか。旦那さん。」

「驚かしなさんな。」

「吃驚びっくりしただろ、あの、別嬪べっぴんに。……それだよ、それが小春こはるさんだ。この土地の芸げいし

妓やでね、それで、雑貨店の若旦那を、治兵衛坊主と言うだてば。」

「成程、紙屋——あの雑貨店の亭主だな。」

「若い人だ、活いきるわ、死ぬるわという評判ものだよ。」

「それで治兵衛……は分つたが、坊主とはどうした訳かね。」

「何、旦那さん、癩癩かんしやくもち持もちの、嫉妬やきもちやきで、ほうずもねえ逆気性のぼせしょうでね、おまけに、

しつこい、いんしん不通だ。」

「何?……」

「隠元豆、田螺さあね。」

「分らない。」

「あれ、ははは、いんきん、たむしだてば。」

「乱暴だなあ。」

「この山代の湯ぐらいでは埒あかねえさ。脚氣山中、かさ粟津の湯へ、七日湯治をしねえ事には半月十日寝られねえで、身体中搔筆つて、目が引釣り上る若旦那でね。おまけに、それが小春さんに、金子も、店も田地までも打込んでね。一時は、三月ばかりも、家へ入れて、かみさんにしておいた事もあつたがね。」

—— 初女房、花嫁ぶりの商いはこれで分つた——

「ちやんと金子を突いたでねえから、抱えぬしの方で承知しねえだよ。摺つた揉んだの拳句が、小春さんはまた棲を取っているだがね、一度女房にした女が、客商売で出るもんだで、夜がふけてでも見なさいよ、いらいらして、逆氣上つて、痛痒い処を引掻いたくらいでは埒あかねえで、田にしも隠元豆も地だんだを踏んで喰嚙るだよ。血は上ずつても、性は陰気で、ちり蓮華の長い顔が蒼しよびれて、しゃくれてさ、それで負けじ魂で、張立てる治兵衛だから、人にものさ言う時は、頭も唇も横町へつん曲るだ。のぼせて、頭

ばっかり赫々と、するもんだで、小春さんのいい人で、色男がるくせに、頭髮さ、すべりと一分刈にしている処で、治兵衛坊主、坊主治兵衛だ、なあ、旦那。」

かくと聞けば、トラホーム、目の煩いと思つたは恥かしい。袂に包んだ半紙の雫は、まさに山茶花の露である。

「旦那さん、何を考えていなさるだね。」

三

「そうか——先刻、買ものに寄つた時、その芸妓は泣いていたよ。」

「あれ、小春さんが坊主の店に居ただかね。すいても嫌うても、氣立の優しいお妓だから、内証で逢いに行つただろさ。——ほんに、もうお十夜だ——氣むずかしい治兵衛の嫗も、やかましい芸妓屋の親方たちも、ここ一日二日は講中で出入りがやがやしておるで、その隙に密と逢いに行つたでしょ。」

「お安くないのだな。」

「何、いとしゅうて泣いてるだか、しつこくて泣かされるだか、知れたものではないのだ

よ。」

「同じ事を……いという方しておくがいい。」

と客は、しめやかに言つた。

「厭いやな事だ。」

「大層嫌うな。……その執拗しつこい、嫉妬しつと深いのに、口説くどかれたらお前はどする。」

「横はびんた撲りこくるだ。」

「これは驚いた。」

「北国一だ。山代の巴板ともえはん額だよ。四斗八升の米俵、両手で二俵提げるだよ。」

「偉い！……その勢いきおいで、小春の味方をしてやり。」

「ああ、すべいよ、旦那さんが言わつしやるなら。……」

「わざと……いささかだけでも御祝儀だ。」

肩を振つて、拗すねたように、

「要らねえよ。——私うちこんなもの。……旦那さん。——旅行たびさきで無駄な金を遣わねえが

いいだ。そして……」

と顔を向け直すと、ちよつと上まぶたで客を視みて、

「旦那さん、いつ帰るかね。」

「いや、深切しんせつは難有ありがたいが、いま来たばかりのものに、いつ出程たつかは少し酷ひどだろう。」

「それでも、先刻さつき来た時に、一晚泊どまりだと言ったでねえかね。」

「まったくだ、明日は山中やまなかへ行くつもりだ。忙しい観光団さ。」

「緩り居ゆるくなされば可いいに——では、またじきに来なさいよ。」

と、真顔で言つた。

客はその言ことばに感じたように、

「勿論来ようが、その時、姐さんは居なからう。」

「あれ、何でえ？……」

「お嫁に行くから。」

したたか頭かぶりを掉ふつて、

「ううむ、行かねえ。」

「治兵衛坊主が、たつて欲しいと言うそうだ。」

「馬鹿を言うもんでねえ。——治兵衛だろうが、忠兵衛だろうが、……一生嫁に行かねえで待つてゐるだよ。」

「じゃあ、いつそ、どこへも行かないで、いつまでもここに居ようか。私をお婿さんむこにしてくれれば。……」

「するともさ。」

「私は働がないのだから、婿も養子だ。お前さん養ってくれるかい。」

「ああ、養うよ。朝から晩まで好きな時に湯に入れて、御飯おまんまを食べさして、遊ばしておけばそれでよからうがね。」

「勿体もったいないくらい、結構だな。」

「そのくらいなら……私が働く給金でして進ぜるだ。」

「ほんとかい。」

「それだがね、旦那さん。」

「御覧、それ、すぐに変替へんがえだ。」

「ううむ、ほんとうだ、が、こんな上段の室までは遣切やりきれねえだ。——裏座敷の四畳半か六畳で、ふしようにして下さんせ、お膳の御馳走も、こんなにはつかねえが、私が内証ないしよでどうともするだよ。」

客は赤黒く、口の尖とがった、にきびで肥ふとった顔を見つつ、

「姐さん、名は何と言う。」

と笑って聞いた。

「ふ、ふ、ふ。」と首を振っている。

「何と言うよ。」

「措^おきなさい、そんな事。」

と耳^{みみたば}朶^{まつか}まで真赤にした。

「よ、ほんとに何と言うよ。」

「お光だ。」

と、飯^{めし}櫃^{びつ}に太い両手を突張^{つっぱ}つて、びよいと尻^{もつた}を持立てる。

遁^{にげ}構^{がまえ}でいるのである。

「お光さんか、年^{とし}紀は。」

「知らない。」

「まあ、幾^{いくつ}歳^{さい}だい。」

「顔だ。」

「何、」

「私の顔だよ、猿だてば。」

「すると、幾歳だっけな。」

「桃栗三年、三歳みつだよ、ははは。」

と笑いながら駈出かけだした。この顔が——くどいようだが——楊貴妃の上へ押並んで振向いて、

「二十はたちだ……馳いただ……べべべべ、べい——」

四

ここに、第九師団衛えいじゆ成病院の白い分院がある。——薬師寺、万松園まんしょうえん、春日山かすがやまなどと共に、療養院は、山代の名勝に入っている。絵はがきがある。御覧なさい。

病院にして名勝の絵になったのは、全国ここばかりであろうも知れない。

この日当りで暖かそうなが、青白い建ものの、門の前は、枯葉半ば、色づいた桜の木が七八株、一列に植えたのを境に、もう温泉いでゆの町も場末のはずれで、道が一坂小だかくなつて、三方は見通しの原で、東に一帶の薬師山の下が、幅の広いなわて暇になる。桂谷かつらだにと言うのへ通ずる街道である。病院の背後を劃しきつて、蜿々うねうねと続いた松まじりの雑木山は、畠を

隔てたばかり目の前に近いから、遠い山も、峻しい嶺も遮られる。ために景色が穏かで、空も優しい。真綿のように処々白い雲を刷いたおっとりとした青空で、やや斜な陽が、どこことなく立渡る初冬の霧に包まれて、ほんのりと輝いて、光は弱い、まともに照らされては、のぼせるほどの暖かさ。が、陰の袖は、そぞろに冷い。

その近山の裾は半ば陰つたが、病院とは向う合せに、この畧から少し低く、下りめになつて、陽の一杯に当る枯草の路が、ちよろちよるとついで、その径と、畧の交叉点がある。一方が広々ゆるく三角になつて、十坪ばかりの畑が一枚。見霽の野山の中に一つある。朽ちた杭ばかりとした刈田との境に、垣根もあつたらしいが、竹も塀もこわれぐわれで、朽ちた杭ばかり一本、せめて案山子にでも化けたように灰色に残つて、尾花が、ぼうと消えそうに、しかし陽を満々と吸つて、あ、あ、長閑な欠伸でも出そうに、その杭に凭れている。藁が散り、木の葉が乱れた畑には、ここらあたり盛に植える、杓子菜と云つて、株の白い処が似ているから、蓮華菜とも言ふのを、もう散々に引棄てたあとへ、陽氣が暖だから、乾いた土の、ほかほかともりあがつた処へ、細く青く芽をふいた。

畑の裾は、町裏の、ごみごみした町家、農家が入乱れて、樹立がぐれに、小流を包んで、ずっと遠く続いたのは、山中道で、そこは雲の加減で、陽が薄赤く颯と射す。

色も空も一淀^{ひとよど}みする、この日溜^{ひだま}りの三角畑の上ばかり、雲の瀬に紅^{べに}の葉が柵^{しがら}むように、夥^{おびただ}多^{あかとんぼ}しく赤蜻蛉^{あかとんぼ}が群^むれていた。——出会^あつたり、別^{わか}れたり、上^う下^げにスツと飛^とんだり。あの、紅また薄紅、うつくしい小さな天女の、水晶の翼は、きらきらと輝^{きら}くのだけれど、もう冬で……遊^{たけなわ}びも閑^{うつとり}に、恍^う惚^としたらしく、夢を徜徉^{さまよ}うように、ふわふわと浮^うきつ、沈^{しず}みつ、漾^{ただよ}いつ。で、時々目がさめたように、パツと羽を光らせるが、またぼうとなつて、暖^{ぬか}かに霞^{かすみ}んで飛交^とう。

日南^{ひなた}の虹^{にじ}の姫^{ひめ}たちである。

風情^{ふうせい}に見惚^{みと}れて、近江屋の客はただ一人、三角畑の角に立^たつて、山を背^せに繞^{めぐ}らしつ^たつ^たつ^たイ^たんでい^るのであ^つた。

四^{あたり}辺^{のど}の長閑^{しずか}かさ。しかし静^{しず}かな事^{こと}は——昼飯^{ひるめし}を済^すませてから——買^かいものに出^でた時^{とき}とは反対^{さか}の方^{ほう}に——そぞろ歩^{ある}行^きでぶらりと出^でて、温泉^{いづゆ}の廓^{くわく}を一巡^{ひと}り、店^{みせ}さきのきらびやかな九谷焼^{くぐやけ}、奥^{おく}深く彩^{いろ}つた漆器^{しやくき}店^{みせ}。両^{りやう}側^{がわ}の商店^{しょうてん}が、やがて片側^{ひとがわ}になつて、媚^{なまめ}かしい、紅^{べに}がら格子^{ごうし}子を五^ご六^{ろく}軒^{けん}見^みたあとは、細^せ流^{せうり}が流^{なが}れて、薬師山^{やくしやま}を一方^{ひとがわ}に、呉^{くれ}羽^は神^{じん}社^{しゃ}の大鳥居^{おほとり}前^{まへ}を過^かぎたあたりから、往^ゆ来^きう人^{ひと}も、来^きる人^{ひと}も、なくなつて、古^{ふる}ぼけた酒^{さか}店^{みせ}の杉葉^もの下^{もと}に、茶^{ちや}と黒^{くろ}と、鞆^{まり}の伸^のびたほどの小犬^{せうけん}が、上^うになり下^{した}になり、おつとりと耳^{みみ}を噛^かんだり、ちよいと鼻^{はな}づらを

ひつ
引かき合つたり。……これを見ると、羨ましいか、桶の蔭から、むくと起きて、脚をひろ
げて、もう一匹よちよちと、同じような小犬は出て来ても、村の閑寂間か、棒切持った
小兒も居ない。

で、ここへ来た時……前途山の下から、頬被りした脊の高い草鞋ばきの親仁が、柄の
長い鎌を片手に、水だか酒だか、縄からげの一升罎をぶら下げたのが、てくりてくり
と、囁を伝い、松茸の香を芬とさせて、蛇の莫座と称うる、裏白の葉を堆く装った大籠
を背負つたのを、一ツゆすつて通過ぎた。うしろ形も、罎と鎌で調子を取つて、大手を振
つた、おのずから意氣の揚々とした処は、山の幸を得た誇を示す。……籠に、あの、ばさ
ばさ群つた葉の中に、鯰のような、小鮒のような、頭の大な茸がびちびち跳ねていそうな
のが、温泉の方へずつと入った。しばらく、人に逢つたのはそればかりであつた。

客は、陽の赤蜻蛉に見惚れた瞳を、ふと、畑際の尾花に映すと、蔭の片袖が悚然とし
た。一度、しかとしめて拱いた腕を解いて、やや震える手さきを、小髻に密と触れると、
喟然として面を暗うしたのであつた。

日南に霜が散つたように、髻にちらちらと白毛が見える。その時、赤蜻蛉の色の真紅な
のが忘れたようにスツと下りて、尾花の下に、杭の尖に留つた。……一度伏せた羽を、衝

と張った、きらりと輝かした時、あの緑の目を、ちよつと此方へ振動かした。

小狗の戯にも可憐だ。幼心に返つたのである。

教授は、ほとびるがとき笑顔になつた。が、きりりと唇をしめると、真黒な厚い大外套の、背腰を尻びりに屈めて、及腰に右の片手を伸しつつ、密と狙つて寄つた。が、どうしてどうして、小児のように軽く行かない。ぎくり、しゃくり、いまが大切、……よちりと飛附く。……南無三寶、赤蜻蛉は颯と外れた。はつと思つた時である。

「おほほほ。ははははは。」

花々しく調子高に、若い女の笑声が響いた。

向うに狗児の形も、早や見えぬ。四辺に誰も居ないのを、一息の下に見渡して、我を笑うと心着いた時、咄嗟に浚面を造つて、身を捻じるように振向くと……

この三角畑の裾の樹立から、広野の中に、もう一条、畷と傾斜面の広き刈田を隔てて、突当りの山裾へ畦道があるのが屏風のごとく連つた、長く、丈の高い掛稲のずらりと続いたのに蔽われて、半ばで消えるので気がつかなかった。掛稲のきれ目を見ると、遠山の雪の頂が青空にほとばしつて、白い兎が月に駆けるようである。下も水のごとく、尾花

の波が白く敷く。刈残した粟あわの穂の黄色なのと段々になって、立蔽う青い霧に浮いていた。と見向いた時、畦の嫁菜を褌つまにして、その掛稻こなたの此方に、目も遙はるかな野原刈田を背にして間あわいが離れて確しかとは見えぬが、薄うす藍あいの浅葱あやぎの襟して、髪つやの艶やかな、色の白い女が居て、いま見合せた顔を、急に背けるや否や、たたきつけるように片袖を口に当てたが、声は高々と、澄切った空を、野に響いた。

「おほほほほ、おほほほ、おほほほほ。」

おや、顔に何かついてる？……すべりを扱しごいて、思わず撫なでると、これがまた化かされるものが狐に對する眉毛に唾つばと見えたらう。

金切声で、「ほほほほほ。」

十歩ばかり先に立つて、一人男の連つれが居た。縞しまがらは分らないが、くすんだ装なりで、青磁色なかにの中折帽なかおれぼうを前のめりにした小造こづくりな、瘦やせた、形の粘ねば々ねばとした男であつた。これが、その晴やかな大おお笑わらいの笑声に驚いたように立留ひざじらつて、廂ひさじら睨にらみに、女を見ている。

何を笑う、教授はまた……これはこの陽気に外套を着たのが可笑おかいのであらうと思つた……言うまでもない。——途中でな、誰を見ても、若いものにも、老人としよりにも、外套を着たものは一人もなかつた。湯の廓は皆柳の中を広袖どてらで出歩で行く。勢いきおいなのは浴衣一枚、裸はだか体

も見えた。もつとも宿を出る時、外套はと気がさしたが、借りて着込んだ浴衣の糊が硬々と突張つて、広袖の膚につかないのが、悪く風を通して、ぞくぞくするため、すっぽりと着込んでいるのである。成程、ただ一人、帽子も外套も真黒に、畑に、つつくりと立った処は、影法師に狐が憑いたようで、禪をぶら下げて裸で陸に立ったより、わかい女には可笑しからう……

いや、蜻蛉釣だ。

ああ、それだ。

小鬢に霜のわれらがと、たちまち心着いて、思わず、禁ぜざる苦笑を洩すと、その顔がまた合った。

「ぶッ、」と噴出すように更に笑った女が、堪らぬといった体に、裾をぱッぱッと、もとの方へ、五歩六歩駈戻つて、捻じたように胸を折つて、

「おほほほほ。」

胸を反して、仰向けに、

「あはははは。」

たちまちくるりとうしろ向きに、何か、もみじの散りかかる小紋の羽織の背筋を見せて、

向うむきに、雪の遠山へ、やたらに叩頭おしぎをする姿で、うつむいて、

「おほほ、あはは、あははははは。あははははは。」

やがて、朱鷺色ときいろの手巾ハンケチで口を蔽おほうて、肩で呼吸いきして、向直つて、ツンと澄すまして横顔で歩行あるこうとした。が、何と、自から目おのずがこつちに向くではないか。二つ三つ手巾に、すぶりをくれて、たたきつけて、また笑つた。

「おほほほ、あははは、あははははは。」

八口やつちを洩もける紅くれなゐに、腕の白さのちらめくのを、振つて揉もんで身悶みもだえする。

きよろんと立つた連つれの男が、一歩返して、圧おさえるごとくに、握にぎり拳こぶしをぬつと突出すと、今度はその顔を屈かがみ腰に仰向おほむかいて見て、それにも、したたかに笑つたが、またもや目を教授こうじゆに向けた。

教授こうじゆも堪こらえず、ひとり寂しくニヤニヤとしながら、半ば茫然として立つていたが、余りの事に、そこで、うつかり、べかッこを遣つたと思え。

「きやつ、ひいッ。」と逆に半身を折つて、前へ折曲ひばらげて、脾腹ひばらを腕で圧おさえたが追おつ着つかない。身を悶え、肩を揉み揉みへとへとなつたらしい。……畦の端の草もみじに、だらしなく膝をついた。半襟の藍に嫁菜よめなが咲いて、

「おほほほほほ、あはははは、おほほほほ。」

そこを両脇、乳も、胸も、もそもそと尾花が擦る！ はだかる襟の白さを合すと、合す隙に、しどけない膝小僧の雪を敷く。島田髷も、切れ、はらはらとなつて、

「堪忍しよう、おほほほほ、あははははは。」

と、手をふるはずみに、鳴子縄に、くいつくばかり、ひしと縋ると、刈田の鳴子が、山に響いてからからから、からからからから。

「あはははははは。おほほほほ。」

勃然とした体で、島田の上で、握拳の両手を、一度打擲をするごとくふつて見せて、むつとして男が行くので、はあはあ膝を摺らし、腰を引いて、背には波を打たしながら、身を蛇らせて、やつと立つて、女は襟を引合せぎまに振向くと、ちよつと小腰を屈めながら、教授に会釈をするが疾いか。

「きやあ——」と笑つて、衝と駆けぎまに、男のあとを掛稲の背後へ隠れた。

その掛稲は、一杯の陽の光と、溢れるばかり雀を吸つて、むくむくとして、音のするほど膨れ上つて、なお堪えず、おほほほほ、笑声を吸込んで、遣切れなくなつて、はち切れた。稲穂がゆさゆさと一斉に揺れたと思うと、女の顔がぼつと出て、髪を黒く、唇を紅く、

「おほほほほほほ、あはははははは。」

「白痴奴、汝！」

ねつい、怒つた声が響くと同時に、ハツとして、旧の路へ遁げ出した女の背に、つかみかかる男の手が、伸びつつ届くを、躲そうとしたのが、真横にばったり。

伸しかかると、二ツ三ツ、ものをも言わずに、頬とも言わず、肩とも言わず、男の拳が、尾花の穂がへし折れるように見えて打擲した。

顔も、髪も、土まみれに、真白な手を袖口から、ひしと合せて、おがんで縋つて、起きようとすると、腕を払つて、男が足を上げて一つ蹴た。

瞬くばかりの間である。

「何をする、何をする。」

たかが山家の恋である。男女の痴話の傍杖より、今は、高き天、広き世を持つ、学士柳三吉も、むかし、一高で骨を鍛えた向陵の健児の意気は衰えず、

「何をする、何をするんだ。」

草の径もどかしい。畦ともいわず、刈田と言わず、真直に突切つて、颯と寄つた。この勢いに、男は桂谷の山手の方へ、掛稻を縫つて、烏とともに飛んで遁げた。

「おお。」

「あ、あれ、先刻さつぎの旦那さん。」

遁げた男は治兵衛坊主で——お光に聞いた——小春であつた。

「外套を被かぶつて、帽子をめて、……見違えて、おほほほ、失礼な、どうしましょう。」

と小春は襟も帯も乱れた胸を、かやく手でおさえて、片手で外套の袖に縋りながら、蒼白まつさおな顔をして、涙の目でなお笑つた。

「おほほほほ、堪忍、御免なすつて、あははははは。」

妙齡としごろだ。この箸がころんでも笑うものを、と慄然ぶぜんとしつつ、駒下駄が飛んで、はだし

の清い、肩も膝も紅くれなゐの乱れた婦おんなの、半ば起きた肩を抱いた。

「御免なすつて、旦那さん、赤蜻蛉をつかまえようと遊ばした、貴方あなたの、貴方の形が、余

り……余り……おほほほほ。」

「いや、我ながら、思えば可笑おかしい。笑うのは当り前だ。が、気の毒だ。連つれの男は何という乱暴だ。」

「ええ、家うちではかえつて人目に立つツて、あの、おほほ、心しんじゅう中の相談をしに來た処だものですから、あはははは。」

ひとと胸に、顔をうずめて、泣きながら、
「おほほほほほ。」

五

「旦那さん、そんなら、あの、私、……死なずと大事ごさいませんか……」

「——言うだけの事はないよ、——まるツきり、お前さんが慾ばかりでだましたのでみた
処で……こっちは芸妓だ。罪も報もあるものか。それに聞けば、今までに出来るだけは、
人情も義理も、苦勞をし抜いて尽しているんだ。……勝手な極道とか、遊蕩とかで行
留りになった男の、名は体のいい心中だが、死んで行く道連れにされて堪るものではない。
——その上、一人身ではないそうだ。——ここへ来る途中で俄盲目の爺さんに逢つて、
おなじような目の悪い父親があると言つて泣いたじゃないか。」——

掛稲、嫁菜の、畦に倒れて、この五尺の松に縋つて立った、山代の小春を、近江屋へ
連戻つた事は、すぐに領かれよう。芸妓である。そのまま伴つて来るのに、何の仔細も

なかつたこともまた断るに及ぶまい。

なお聞けば、心中は、単に相談ばかりではない。こうした場所と、身の上では、夜中よりも人目に立たない、静しずかな日南ひなたの隙を計つて、岐路えだみちをあれからすぐ、桂谷へ行くと、浄じやう行よう寺じと云う門徒宗が男の寺。……そこで宵の間に死ぬつもりで、対手あいての袂たもとには、商あきも

の、（何とか入らず）と、懷中には小刀ナイフさえ用意していたと言うのである。

上前うわまえの摺ずり下さがる……腰帶ゆるの弛んだのを、氣にしたい、片手でほつれ毛を搔きながら、少しあとへ退さがつてついて来る小春の姿は、道行みちゆきから遁にげたとよりは、山奥の人身御供ひとみぐうから助出たすけだされたもののようであつた。

左山中道みち、右桂谷道、と道程みちしるべ標の立つた追分おいわけへ来ると、——その山中道の方から、脊のひよろひよるとした、頤あごの尖とがつた、瘦やせこけた爺じいさんの、菅の一もんじ笠を真直まっすぐに首に据えて、腰に風呂敷包をぐらつかせたのが、すあしに破脚絆やぶれぎやはん、草鞋穿わらじばきで、とぼとぼと竹の杖つえに曳ひかれて来たのがあつた。

この竹の杖を宙に取つて、さきを握つて、前へも立たず横添よこぞいに導きつつ、くたびれ脚を引摺つたのは、目も耳もかくれるような大な鳥打帽おおきの古いのをかぶつた、八つぐらいの男この児で。これも風呂敷包を中結なかゆわえして西行背負さいぎようじいに背負よつていたが、道中みちなかへ、弱

々と出て来たので、横に引張合ひつぱりあった杖が、一方通せん坊になつて、道程標みちしるべの辻の処で、教授は足を留めて前へ通した。が、細流せせらぎは、これから流れ、鳥居は、これから見え、町もこれから賑にぎやかだけれど、俄めくらと見えて、突立つたった足を、こぶらに力を入れて、あげたり、すばめたりするように、片手を差出して、手探りで、巾着きんちやく ほどな小児こどもに杖を曳かれて辿たどる状さま。いま生命いのちびろいをした女でないと、あの手を曳いて、と小春に言つてみた。いほど、山家の冬は、この影よりして、町も、軒も、水も、鳥居も暗く黄昏たそがれた。

駒下駄のちよこちよこあるきに、石段下、その呉羽の神の鳥居の蔭から、桃割ももわれぬれた結立ゆいたてで、緋鹿子ひがのこの角絞つのしぼり。簪かんざしをまだささず、黒縹くろじゆす子の襟の白粉垢おしろいあかの冷たそうなかすりの不断着をあわれに着て、……前垂まえだれと帯の間へ、古風に手拭てぬぐいを細く挟んだ雛妓おしやが、殊勝くにも、お参詣まいりの戻もどりらしい……急足いそぎあしに、つつつと出た。が、盲目めくらの爺とつさんとすれ違つて前へ出たと思うと、空から抱留められたように、ひたりと立留つて振向いた。

「や、姉ちゃん。」——と小児こどもが飛着く。

見る見るうちに、雛妓おしやの、水晶のような睜みはつた目は、一杯の涙である。

小春は密そつと寄添うた。

「姉ちゃん、お父ちゃんが、お父ちゃんが、目が見えなくなるから、……ちよつと姉ちゃ

んを見てえつてなあ。……」

西行背負の風呂敷づつみを、肩の方から、いじけたように見せながら、

「姉ちゃん、大すきな豆の餅あんもを持って来た。」

ものも言い得ず、姉さんは、弟のその頭つむりを撫なでると、仰いで笠うちの裡じつを熟じつと視みた。その笠を被かぶつて立てる状さまは、かかる苦界にある娘に、あわれな、みじめな、見すばらしい俄盲目には見えないで、しなびた地藏菩薩じぞうぼさつのようであつた。

親仁おやじは抱しめもしたそうに、手探りに出した手を、火傷やけどしたかと慌てて引いて、その手を片手おがみに、あたりを拝んで、誰ともなしに叩頭おしぎをして、

「御免下され、御免下され。」

と言つた。

「正念寺様におまいりをして、それから木賃ゆへ行くそうです。いま参りましたのは、あの妓こがちよつと……やかたへ連れて行きましたの。」

突つきあたり 当あたりらしいが、横町を、その三人が曲りしなに、小春が行きすがりに、雛妓おしやくさぎやと囁

いて「のちにえ。」と言つて別れに、さて教授にそう言つた。

——来た途中の俄盲目は、これである——

やがて、近江屋の座敷では、小春を客分に扱って、膳を並べて、教授が懇に説いたのであつた。

「……ほんとに私、死なないでも大事ございませんわね。」

「死んで堪^{たま}るものか、死ぬ方が間違つてるんだ。」

「でも、旦那さん、……義理も、人情も知らない女だ、薄情だと、言われようかと、そればかりが苦になりました。もう人が何と言いましようと、旦那さんのお言^{ことば}ばかりで、どんなに、あの人から責められましても私はきつぱりと、心中なんか厭^{いや}だと言います。お庇^{かげ}さまで助りました。またこれで親兄弟のいとしい顔も見られます。もう、この一年ばかりこのかたと言いますもの、朝に晩に泣いてばかり、生きた瀬はなかったのです。——その苦^{くるし}みも抜けました。貴方は神様です。仏様です。」

「いや、これが神様や仏様だと、赤蜻蛉の形をしているのだ。」

「おほほ。」

「ああ、ほんとに笑つたな——もう可^よし、決して死ぬんじゃないよ。」

「たとい間違っておりましても、貴方のお言ことばばかりで活いきます。女の道に欠けたと言われ、薄情だ、売女ばいしただと言う人がありましても、……口に出しては言いませんけれど、心では、貴方のお言葉ゆえと、安心をいたします。」

「あえて構わない。この俺が、私と言うものが、死ぬなど言ったから死なないと、構わず言え。——言つたつて決して構わん。」

「いいえ、勿体ない、お名ふだもおねだり申して頂きました。人には言いはしませんが、まあ、嬉しい。……嬉しゅうございますわ。——旦那さん。」

「……………」

「あの、それですけれど……安心をしましたたせいですか、落胆がっかりして、力が抜けて。何ですか、余り身体からだにたわいがなくなつて、心細くなりました。おそばへ寄せて下さいまし……こんな時でございませんか、思い切つて、お顔が見られないのでございますけど、それでも、やつぱり、暗くて見えはしませんわ。」

と、膝そつに密と手を置いて、振仰いだらしい顔がほの白い。艶濃つやこき髪かの薫かおりより、眉がほんのりと香においそうに、近々とありながら、上段の間は、いまほとんど真暗まつくらである。

六

実は、さきに小春を連れて、この旅館へ帰った頃に、廊下を歩行あるき馴なれたこの女が、手を取ったほど早や暗くて、座敷も辛かろうじて黒白あいろの分るくらいであつた。金屏風きんびょうぶとむきあつた、客の脱すてを掛けた衣桁いこうの下もとに、何をしていたか、つぐんでいて、道陸神どうろくじんのような影を、ふらふらと動かして、ぬいと出たものがあつた。あれと言つた小春と、ぎよつとした教授に「北国一。」と浴せあび掛けて、またたく間に廊下をすつ飛んで行つたのは、あのお光であつたが。

直すぐに小春が、客の意を得て、例の卓上電話で、二人の膳を帳場に通すと、今度註文をうけに出たのは、以前の、齒を染めた寂しい婦おんなで、しょんぼりと起居たちいをするのが、何だか、産女うぶめ鳥のように見えたほど、——時間はさまでもなかったが、わけてこの座敷は陰気だつた。

頼もしいほど、陽氣にぎやに賑かなのは、廂ひさしはずれに欄干の見える、崖の上の張出しの座敷で、客も大勢らしい、四五人の、芸妓の、いろいろな声に、客のがまじって、唄う、弾く、踊つていた。

船の舳の出たように、もう一座敷重つて、そこにも三味線の音がしたが、時々哄と笑う声は、天狗が餌を返すように、崖下の庭は暮れるものを、いつまでも電燈がつかない。

小春の藍の淡い襟、冷い島田が、幾度も、縁を覗いて、ともに燈を待ちもした。

この縁の突当りに、上敷を板に敷込んだ、後架があつて、機械口の水も爽だつたのに、その暗紛れに、教授が入った時は一滴の手水も出なかつたので、小春に言う、電話までもなく、帳場へ急いで、しばらくして、真鍮の水さしを持って来て言うのには、手水は発動機で汲上げている処、発電池に故障があつて、電燈もそのために後れると、帳場で言っているそう。そこで中縁の土間の大きな石の手水鉢、ただし落葉が二三枚、不思議に燈籠に火を点したように見えて、からからに乾いて水はない。そこへ誘つて、つき膝で、艶になまめかしく颯と流してくれて、

「あれ、はんけちを田圃道で落して来て、……」

「それも死神の風呂敷だつたよ。」

「可恐いわ、旦那さん。」

その水さしが、さて……いまやつぱり、手水鉢の端に据っているのが幽に見える。夕暮

の鷺^{さぎ}が長い嘴^{くちばし}で留^{とど}つたようで、何となく、水の音も、ひたひたとするようだったが、この時、木菟^{みみずく}のようになって、とつぷりと暮^{まつ}れて真暗^{まっくら}だった。

「どうした、どうした。……おお、泣いているのか。——私は……」

「ああれ、旦那さん。」

と、廁^{かわや}の板戸を、内から細目に、小春の姿が消えそうに、

「私、つい、つい、うっかりして、あのお恥^{はにか}かしくって泣くんですわ……ここには水がありません。」

「そうか。」

と教授が我が手で、その戸を開けてやりつつ、

「こつちへお出で、かけてやろう。さ。」

「は。」

「可^いいか、十分に……」

「あれ、どうしましょう、勿体ない、私は罰が当たります。」

懷紙に二階の影が散る。……高い廊下をちらちらと燭^{しょく}台^{だい}の火が、その高^{たか}楼^{かど}の欄干^{てすり}

を流れた。

「罰の当ったはこの方だ。——しかし、婦人おんなの手に水をかけたのは生れてからはじめてだ。赤ん坊になったから、見ておくれ。お底かげで白髪が皆消えて、真黒まっくろになったろう。」

まことに髪が黒かった。教授の顔の明るさ。

「この手水鉢は、実盛さねもりの首くび洗あらの池も同じだね。」

「ええ、縁起でもない、旦那さん。」

「ま、姦通まおとこめ。ううむ、おどれ等。」

「北国一だ。……危あぶえよ。」

殺した声と、呻うめく声で、どたばた、どしんと音がすると、万歳と、向二階むこうで喝采やんや、ともろ声わめに喚わめいたのほとんど一所に、赤い電燈が、蒟蒻こんやくのようにぶるぶると震えて点ついた。

七

小春の身を、背かばに庇かばって立った教授が、見ると、繻子しゆすの黒足袋の鼻緒はなごずれに破れた奴やつを、

ばたばたと空に撥ねる、治兵衛坊主を真俯向けに、押伏せて、お光が赤蕪のような膝をはだけて、のしかかっているのである。

「危い——刃ものを持つてゐるぞ。」

絨毯を縫いながら、治兵衛の手の大小刀が、しかし赤黒い電燈に、錆びむかでうに蠢くのを、事ともしないで、

「何が、犬にも牙がありや、牛にも角があるだあね。こんな人間の刃ものなんで、どうするかね。この馬鹿野郎。それでも私が来ねえと、大事なお客さんに怪我をさせる処だつけ。飛んでもねえ嫉妬野郎だ。大い声を出してお帳場を呼ぼうかね、旦那さん、どうするね。私が一番横ずつぼう撲りこくつてやろうかね。」

「ああ、静に——乱暴をしちや不可い。」

教授は敷居へ、内へ向けて引きながら、縁側の籐椅子に掛けた。

「君は、誰を斬るつもりかね。」

「うむ、汝から先に……当前じゃい。うむ、放せ、口惜いわい。」

「迷惑をするじゃあないか。旅の客が湯治場の芸妓を呼んで遊んだが、それがどうした。」

「汝、俺の店まで、呼出しに、汝、逢曳にうせおって、姦通め。」

「血迷うな、誤解はどうでも構わないが、君は卑劣だよ。……使った金子に世の中が行詰って、自分で死ぬのは、間違いにしろ、勝手だが、死ぬのに一人死ねないで、未練にも相手の女を道づれにしようとして附絡うのは卑劣じゃあないか。——投出す生命に女の連を拵えようとするしみつたれさはどうだ。出した祝儀に、利息を取るよりけちな男だ。君、可愛い女と一所に居る時は、蚤が一つ余計に女にたかつて、ああ、おれの身をかわりに吸え、可哀想だと思いが情だ。涼しい時に虫が鳴いても、かぜを引くなよ、寝冷をするなど念じてやるのが男じゃないか。——自分で死ぬほど、要らぬ生命を持つているなら、おなじ苦労をした女の、寿命のさきへ、鼻毛をよって、継足をしてやるが可い。このうつくしい、優しい女を殺そうとは何事だ。これ聞け。俺も、こんな口を利いたって、ちつとも偉い男ではない。お互に人間の中の虫だ。——虫だが、書物ばかり食っている、しみのような虫だから、失礼ながら君よりは、清潔だよ。それさえ……それでさえ、聞けよ。——心中の相談をしている時に、おやじが蜻蛉釣る形の可笑さに、道端へ笑い倒れる妙齢の気の若さ……今もだ……うっかり手水に行つて、手を洗う水がないと言って、戸を開け得ない、きれいな女と感じた時は、娘のような可愛さに、唇の触ったばかりでも。」

「ううむ、ううむ。」と呻^{うな}った。

「申訳のなさに五体が震える。何だ、その女に対して、隠元^{しずか}、田螺^{たにし}の分際で、薄汚い。いろも、亭主も、心中も、殺すも、活^{いか}すもあるものか。——静^{しずか}にここを引揚げて、早く粟津の湯へ入れ——自分にも二つはあるまい、生命^{いのち}の養生をするが可^いい。」

「餓鬼めが、畜生！」

「おっと、どっこい。」

「うむ、放せ。」

「姐^{ねえ}さん、放しておやり。」

「危^{あぶね}え、旦那さん。」

「いや、私はまだその人に、殺されも、斬られもしそんな気はしない。お放し。」

「おお、もつともな、私がこの手を押えているで、どうする事も出来はしねえだ。」

「さあ、胸を出せ、袖を開けろ。私は指一つ圧^{おさ}えていない。婦人^{おんな}が起^たつてそこへ縋^{すが}れば、

話は別だ。桂清水^{かつらしみず}とか言うので顔を洗って私も出直す——それ、それ、見たが可^いい。婦^お

人は、どうだ、椅子の陰へ小さく隠れて、身を震わしているじゃあないか。——帰りたまえ。」

また電燈が、滅びるように、呼吸をひいて、すつと消えた。

「二人とも覚えてけつかれ。」

「この野郎、どこから入った。ああ、——そうか。三畳の窓を潜って、小こい、庭境の隣家の塀から入ったな。争われぬもんだってば。……入った処から出て行くだからな。壁を摺って、窓を這って、あれ板塀にひつついた、とかげ野郎。」

小春は花のいきするように、ただ教授の背後から、帯に縋って、さめざめと泣いていた。

八

ここの湯の廊は柳がいい。分けて今宵は月夜である。五株、六株、七株、すらすらと立ち長く靡いて、しつとりと、見附を繞って向合う湯宿が、皆この葉越に窺われる。どれも赤い柱、白い壁が、十五間間口、十間間口、八間間口、大きな（舎）という字をさながらに、湯煙の薄い胡粉でぼかして、月影に浮いていて、藁の露も紫に凝るばかり、中空に冴えた月ながら、気の暖かさに朧である。そして裏に立つ山に湧き、処々に透く細い町に霧が流れて、電燈の蒼い砂子を鏤めた景色は、広重がピラミッドの夢を描いたようであ

る。

柳のもとには、二つ三つ用心水みずの、石で亀甲きつこうに囲った水溜みずたまりの池がある。が、涸かれて、寂しく、雲も星も宿らないで、一面に散込んだ柳の葉に、山谷の落葉を誘つて、塚を築いたように見える。とすれば月が覗のぞく。……覗くと、光がちらちらとさすので、水があるのを知つて、影が光る、柳も化粧をするのである。分けて今年は暖あたさに枝垂しだれた黒髪はなお濃こまやかで、中にも真中まんなかに、月光を浴びて漆のように高く立った火の見階子ぼしごに、袖を掛けた柳の一本は瑠璃天井るりてんじょうの階子段に、遊女の凭もたれた風情がある。

このあたりを、ちらほらと、そぞろ歩行あるきの人通り。見附正面の総湯の門には、浅葱あさぎに、紺に、茶の旗が、納手拭おさめてぬぐいのように立つて、湯の中は祭礼まつりかと思う人声の、女まじりの賑かさ。——だぶだぶと湯の動く音。軒前のきさきには、駄菓子店みせ、甘酒の店、飴あめの湯、水菓子の夜店が並んで、客も集れば、湯女ゆなも掛ける。髻ひげが啜すする甘酒に、歌の心は見えないが、白い手にむく柿の皮は、染めたささ蟹かにの糸である。

みな立つ湯気につつまれて、布子も浴衣の色に見えた。

人の出入り一盛り。仕出しの提灯ちようちん二つ三つ。紅あかいは、おでん、白いは、蕎麦そば。横路地ついでを衝つと出て、やや門かどとぎす湯宿の軒を伝う頃、一しきり静しずかになった。が、十夜をあての

夜興行の小芝居もどりにまた冴える。女房、娘、若衆たち、とある横町の土堀の小路から、ぞろぞろと湧いて出た。が、陸軍病院の慰安のための見物がえりの、四五十人の一行が、白い装でよぎったが、霜の使者が通るようで、宵過ぎのうそ寒さの再び春に返ったのも、更に寂然としたのであった。

月夜鴉が低く飛んで、水を潜るように、柳から柳へ流れた。

「うざくらし、厭な——お兄さん……」

芝居がえりの過ぎたあと、土堀際の引込んだ軒下に、潜戸を細目に背にした門口に、月に青い袖、帯黒く、客を呼ぶのか、招くのか、人待顔に袖を合せて、肩つき寒く佇んだ、影のような婦がある。と、裏の小路からふらりと出て、横合からむずと寄って肩を抱いた。その押つぶしたような帽子の中の男の顔を、熟とすかして——そう言った。

「お門が違うやろね、早う小春さんのところへ行く事や。」と、格子の方へくると背く。紙屋は黙って、ふいと離れて、すぐ軒ならびの隣家の柱へ、腕で目をおさえるように、帽子ぐるみ附着いた。

何の真似やら、おなじような、あたまから羽織を引かぶった若い衆が、溝を伝うて、二人、三人、胡乱々々する。

この時であつた。

夜も既に、十一時すぎ、子の刻か。——柳を中に真向いなる、門も鎖し、戸を閉めて、屋根も、軒も、霧の上に、苦掛けた大船のごとく静まつて、梟が演戲をする、板歌舞伎の趣した、近江屋の台所口の板戸が、からからからと響いて、軽く^{すべ}ゑると、帳場が見えて、勝手は明い——そこへ、真黒な外套^{がいとう}があらわれた。

背後^{うしろ}について、長襦袢^{ながじゆばん}するすると、伊達巻ばかりに羽織という、しどけない寝乱れ姿で、しかも湯上りの化粧の香が、月に脈うつて、ぽつと霧へ移る。……と送つて出しなの、肩を叩こうとして、のびた腰に、ポンと土間に反つた新しい仕込みの鰯^{ぼら}と、比目魚^{ひらめ}のあるのを、うっかり跨^{また}いで、怯^{おび}えたような脛白^{はぎ}く、莞爾^{にっこり}とした女が見える。

「くそつたれめ。」

見え透いた。が、外套が外へ出た、あとを、しめぎまに細^ほりと見送る処を、外套が振返つて、頬ずりをしようとする、あれ人が見る、島田を揺^ふつて、おくれ毛とともに背いたけれども、弱々となつて顔を寄せた。

これを見た治兵衛はどうする。血は火のごとく鱗^{うろこ}を立てて、逆^{さか}に尖^さつて燃えた。途端に小春の姿はかくれた。

あとの大戸を、金の額ぶちのように背負つて、揚々として大得意の体で、紅閨のあとを一散步、贅を遣る黒外套が、悠然と、柳を眺め、池を覗き、火の見を仰いで、移香を惜気なく、酔ざましに、月の景色を見る状の、その行く処には、返咲の、桜が咲き、柑子も色づく。……他の旅館の庭の前、垣根などをぶらつきつつ、やがて総湯の前に近づいて、いま店をひらきかけて、屋台に鍋をかけようとする、夜なしの饅飩屋の前に来た。

獺 橋の婆さんと土地で呼ぶ、——この婆さんが店を出すのでは……もう、十二時を過ぎたのである。

犬ほどの蜥蜴が、修羅を燃して、煙のように颯と襲った。

「おどれめ。」

と呻くが疾いか、治兵衛坊主が、その外套の背後から、ナイフを鋭く、つかをせめてグサと刺した。

「うーむ。」と言うと、ドンと倒れる。

獺橋の婆さんが、まだ火のない屋台から、顔を出してニヤリとした。 串 戯だと思つたろう。

「北国一だ——」

と高く叫ぶと、その外套の袖が煽^{あお}つて、紅^{あか}い裾^{すそ}が、はらはらと乱れたのである。

九

——「小春さん、先刻^{さつき}の、あの可愛い雛妓^{おしやく}と、盲目^{めくら}の爺^{とつ}さんたちをここへお呼び。で、お前さんが主人になつて、皆^{みんな}で湯へ入つて、御馳走^{ごちそう}を食べて、互に慰めもし、また、慰められもするが可^いい。

治兵衛坊主は、お前さんの親たち、弟に逢つた事はないか。——なければそれもなお好都合。あの人たちに訳を話すと、おなじ境^{きようがい}界^{がい}にある夥^な間^まだ、よくのみ込むであろうから、爺さんをお前さんの父親、小児^{こども}を弟に、不意に尋ねて来た分に、治兵衛の方へ構^{かま}えるが可^よい。場合によれば、表向き、治兵衛をここへ呼んで逢わせるも可^よからう。あの盲^{めし}いた人、あの、いたいけな児^こ、鬼も見れば角がなごむ。——心配はあるまいものの、また間^ま違^{まちが}がないとも限らぬ。その後^{こうなん}難^{なん}の憂^{うれ}慮^いのないように、治兵衛の氣を萎^{なや}し、心を鎮めさせるのに何よりである。

私は直ぐに立つて、山中へ行く。

わざとらしいようでもあるから、別室へと思わぬでもなければ、さてそうして、お前は爺さんたちと、ここに一所に。……決して私に構うなど言った処で、人情としてそうは行くまい、顔の前に埃ほこりが立つ。構わないにしても気が散ろう。

泣きも笑いもするがいいが、どっちも胸をいたためぬまで、よく楽たのしみ、よくお遊び。」――

あの陰気な女中を呼ぶと、沈んで落着いただけに、よく分つて、のみ込んだ。この趣を心得て、もの優しい宿の主人も、更あらためて挨拶に來たので、大勢送出す中を、学士の近江屋を発程たつたのは、同じ夜よの、実は、八時頃であつた。

勿論、小春が送ろうと言つたが、さっきの今で、治兵衛坊主に対しても穩おだやかでない、と留めて、人目があるから、石屋が石を切つた処、と心づもりの納屋の前を通る時、袂たもとを振切る。……

お光が中くらいな鞆かばんを提げて、肩をいからすように、大跨おおまたに歩行あるいて、電車の出発点まで真直まっすぐに送つて來た。

道は近い、またすぐに出る処であつた。

「旦那さん、蚤のみにくわれても、女あまツ子は可哀相だと言ったが、ほんとかね。」

停車場じょうちやうの人ごみの中で、だしぬけに大声でぶツつけられたので、学士はその時少なからず逡巡うづろしつつ、黙って二つばかり點頭うなずいた。

「旦那さん、お願だから、私に、旦那さんの身についたものを一品ひとしな下んせね。鼻紙でも、手巾ハンケチでも、よ。」

教授は外套を、すつと脱いだ。脱ぎはなしを、そのままお光の肩に掛けた。

このおもみに、トンと圧おされたように、鞆たもとを下へ置いたなりで、停車場を、ひよいと出た。まさか持ったなりでは行くまいと、半ば串じやうだん戲だだったのに——しかし、停車場を出ると、見通しの細い道を、いま教授がのせたなりに、ただ袖に手を掛けたばかり、長い外套の裾すそをずると地に曳摺ひきずるのを、そのまま、不思議に、しよんぼりと帰って行くのを見て、おしげなくほろりとして手を組んだ。

発車した。

——お光は、夜よの隙ひまのあいてから、これを着て、嬉しがって戸外おもてへ出たのである。……
はじめは上段の間へ出向いて、

「北国一。」

と、まだ寝ないで、そこに、羽二重の厚あつぷすま衾、枕を四つ、頭あわせに、身のうき事を問むつごとい、とわれ、睦言のように語り合う、小春と、雛妓おしやく、爺さん、小児こどもたちに見せびらかした。が、出る時、小春が羽織を上につっかけたばかりのなりで、台所まで手を曳いた。

——ああ、その時お光のかぶったのは、小児の鳥打帽であつたのに——

黒い外套を来た湯女ゆなが、総湯の前で、殺された、刺された風説うわさは、山中、片山津、粟津、大聖寺だいしようじまで、電車で人とともに飛んでたちまち響いた。

けたたましい、廊下の話声を聞くと、山中温泉の旅館に、既に就寝中だった学士が、白いシイツはを刎ねて起きた。

寢床から自動車を呼んで、山代へ引返して、病院へ移ったという……お光の病室の床に、胸をしめて立つた時、

「旦那さん、——お光さんが貴方あなたの、お身代り。……私はおくれました。」
と言つて、小春がおもはゆげに泣いて縋すがつた。

「お光さん、私だ、榊だ、分りますか。」

「旦那さんか、旦那さんか。」

と突拍子な高調子で、うわごと 譫言のように言ったが、

「ようこそなあ——こんなものに……面つらも、からだも、山猿ひのしに火熨斗しを掛けた女だと言われたが、髪の毛ばかり皆みんなが賞めた。もう要らん。小春さん。あんた、油くさくて気の毒やが、これを切つて、旦那さんに上げて下さんせ。」

立会った医師が二人まで、目を瞬しばたいて、学士に会釈しつつ、うなずいた。もはや臨終だそうである。

「頂戴しました。——貰ったぞ。」

「旦那さん、顔が見たいが、もう見えんわ。」

「さ、さ、さ、これに縋えんらつしやれ。」

と、ありなしの縁えんに曳かれて、雛妓この小とみ、弟が、かわいい名の小次郎、ともに、杖まで戸惑いしてついて来て、泣いていた、盲目めくらの爺さんが、竹の杖を、お光の手に、手さぐりで握らせるようにして、

「持たつしやれ、縋らつしやれ。ありがたい仏様が見えるぞい。」

「ああい、見えなくなつた目でも、死ねば仏様が見られるかね。」

「おお、見られるとも、のう。ありがたや阿弥あみ陀様。おありがたや親鸞しんらん様も、おありが

たや蓮^{れんによ}如^{ごと}様も、それ、この杖に蓮華の花が咲いたように、光って輝いて並んでじゃ。さあ、見さっしやれ、拜まつさしやれ。なま、なま、なま、なま、なま、なま。」

「そんなものは見とうない。」

と、ツト杖を向うへ刎^はねた。

「私は死んでも、旦那^{そば}さんの傍^{そば}に居て、旦那さんの顔を見るんだよ。」

「勿体ないぞ。」

と口のうちで呟^{つぶや}いて、爺^{おやじ}が、黒い幽霊のように首を伸^のびして、杖に縋^{すが}って伸上^{のびあ}って、見えぬ目^めを上^あねむりに見据^{みぞ}えたが、

「うんにや、道理^{もつとも}じや。俺^{おら}も阿弥陀仏より、御開山より、娘の顔が見たいぞいの。」

と言うと、持った杖をハタと擲^なげた。その風采^{ふうさい}や、さながら一山^{いつさん}の大導師、一体の聖者のごとく見えたのであった。

大正十二（一九二三）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二巻」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みさごの鮎

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>